

川越地方の甘藷先生「赤沢仁兵衛」没後100周年

あかざわ に へ え
～110年前の明治43年に、実験研究を体系化した
甘藷増収法の農書を発行！～

川越いも友の会 事務局長

やま だ えい じ
山田 英次

1 はじめに～川越地方の甘藷先生～

川越地方で甘藷先生といえば、まず始めにあげられるのが、寛延4年（1751）に「川越地方で最初にサツマイモ作り」に成功した南永井村（現：所沢市南永井）の名主・吉田弥右衛門である。次に、明治期に甘藷の栽培法を実証的に研究し、系統的にまとめ上げ、はじめて増収法を確立した赤沢仁兵衛（1837～1920）である。

いも類振興情報第24号（平成2年7月発行）に井上浩先生（元サツマイモ資料館館長）が、すでに赤沢仁兵衛の紹介と功績について書かれているが、今回、没後100周年を記念して、あらためてその事績を再紹介したい。

2 【その生涯】農民・赤沢仁兵衛の決意

赤沢仁兵衛は、江戸期後期の天保8年（1837）10月10日に、川越藩領の今福村（現在の川越市今福）の農民・赤沢又助の三男として生まれた。赤沢一族は、江戸前期、川越城主・松平伊豆守信綱の命により武蔵野新田開発の時に入植（1654年）した赤沢権兵衛を先祖とする、今福村創立以来から続く古い農家だった。

仁兵衛が生まれた家は、本家の約3軒とりの分家であったが、本家は当時女ばか

りの姉妹で男子がいなかったため、慶応元年（1865）3月、28歳の時、本家の赤沢伊兵衛の長女・千代（ちよ・26歳）と結婚し、婿養子となった。仁兵衛は、ちょうど本家の9代目を引き継ぐこととなった。

しかし、婿に入ったものの、本家の赤沢家は借金がたくさんあり（当時の負債800円）、少ない畑や山林などが抵当に入っていて、住んでいた家も、とうとう分家の兄の所有になってしまう状態でもあった。

こんな逆境のなかでも、仁兵衛は一念発起し、「他人の世話にならずに独力で借金



「赤沢仁兵衛」肖像（1837～1920）

を返済し、さらに本家の赤沢家を盛り立てよう」と決意したのだった。しかし、今福の自家の畑は、武蔵野の開墾の土地で強風が吹けば土が飛ばされるようなヤセ地のため、サツマイモ以外作れるものがなかった。だが当時もっとも有利な商品作物であったため、そのサツマイモ作りで多額の借金を返済しようと考えたのである。

3 【その生涯】サツマイモ作りの改良研究

質朴勤勉で多言を好まなかった仁兵衛は、早速、結婚した翌年（1866）2月より、サツマイモの作り方をいろいろと研究しはじめ熱中した。苗床の作り方からスタートし、種芋の選び方、苗の仕立て方、肥料のやり方、ウネのたて方、苗の植え方など、栽培に関するすべてを研究した。そう研究しはじめると（仁兵衛談）「なかなか面白く、年ごとに成績が顕われ」、昼夜を問わず食事の時間もおしんで研究した。その結果、早くも明治の初年に川越の役所が仁兵衛の甘藷畑を調べた時には、普通一反（約10アール）当り300～400貫（1200～1600キログラム）しか収穫できなかったものが、なんと500貫（2000キログラム）以上もの収量があった。 ※注）当時、川越地方で栽培されていた主要な品種は、アカヅル、アオヅルの2品種であった。

4 【その生涯】サツマイモ裁判事件

この川越の役所が調べた事件というのは、次のようなことであった。

仁兵衛の作るサツマイモの収穫量があまりにも多く、たくさんの利益を得ているため、それをねたんだ者が、明治4年（1871）に、「赤沢は他人のサツマイモを盗んでき

て、自分が作ったものと一緒にして多くできたと言っている」と、川越県役所へ訴えたのである。そして、仁兵衛は役所へ呼び出されて取り調べを受けるはめになってしまった。その時、妻の千代は、おおいに激怒して「とんでもない言い掛かりだ。お疑いならば、どうぞうちのサツマイモ畑へきて、いっさいを調べてください」と直訴した。早速、川越県の役人がきて、サツマイモ畑において株をぬいて収量を調査したが、平年作でも他の者の畑より2倍以上の収量があり、その上、作付け反別と販売した甘藷問屋の帳簿を見比べて調べたが、少しの疑いもなかった。仁兵衛はすぐに釈放され、さらに「猶一層、業務に勉励すべし」旨の、激励の言葉をもらって帰ってきた。このことがあってより、仁兵衛は自分の栽培法にさらに自信を深めていったのである。

5 【その生涯】甘藷豪農と栽培法の伝習

このようにしてサツマイモ作りの改良研究に40年余りも励んだ結果、婿に來た時には、宅地1反7歩（約11アール）畑5反歩（約50アール）山林3反5畝歩（約35アール）ですべて抵当に入っていたものが、その後、居宅を買い戻し、土蔵を新築した上、多額の借金を全額返済してしまった。そして、明治末年には宅地1反17歩、畑2町1畝23歩（2,02ヘクタールで約4倍）、山林7反3畝4歩（約73アールで約2倍）にまでなっていた。

明治41年（1908）11月になって、当時の今福村村長・新井玉三郎と入間郡農業技手・秋田文蔵は、仁兵衛の甘藷栽培法に非常に注目して、単に一個人だけでもっているの

は惜しい技術だとして、農業の発展のために世の中に公開することをすすめた。実際、仁兵衛は秘密にせず、うわさを聞いて教えるを乞う者には、丁寧に現場まで出張して行き、その栽培法を親切に教示・伝習するほどであった。

明治42年3月・5月～11月に行った赤沢式甘藷栽培法の入間郡農家（30軒）による試作記録「甘藷試作成績表」をみると、いずれの農家も1反当りの増収（最低1.13倍から約2.5倍）を得て、好成績となり、その有効性を認める結果となっている。

6 【その生涯】『赤沢仁兵衛実験甘藷栽培法』の発刊（1910年：明治43年3月）

赤沢式の栽培法の要点は、主に次の3つであった。

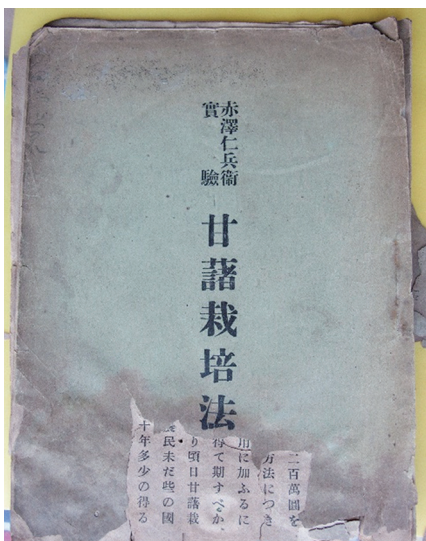
第一に「苗半作と言われるように、良い苗をつくる」。クズイモでなく、形・色の良い中位の大きさのイモを種芋とする。第二に「肥料は灰と自家製の堆肥で、特に堆肥を多く使用する」。第三に「苗を挿すウ

ネはできるだけ高くする。苗の挿し方は、面倒でも釣り針型とする」であった。

明治43年（1910）2月28日、地元の福原小学校で、この赤沢式の甘藷栽培法について仁兵衛が語る講演会が開かれ、翌3月31日に、農業技手・秋田文蔵氏の助言や、多くの発起人と賛同者を得た『赤沢仁兵衛・実験甘藷栽培法』の書が、（編輯兼発行者）今福村村長・新井玉三郎名で非売品として発刊された。それは仁兵衛が73歳の時であった。

※注）この赤沢式甘藷栽培法の書は、農文協発刊（昭和60年4月）『明治農書全集第4巻・畑作編』に収録されている他、国立国会図書館のデータベースでも検索し閲覧することができる。

この書は、大正3年（1914）5月4日まで四版を重ね、また同3月には内容を一新して『赤沢式甘藷栽培改良秘伝書』を出し、最後に「赤沢式甘藷栽培教の歌（17首）」まで付けていて、二版まで発刊している。



「実験甘藷栽培法」の書



「甘藷栽培改良秘伝書」の農書

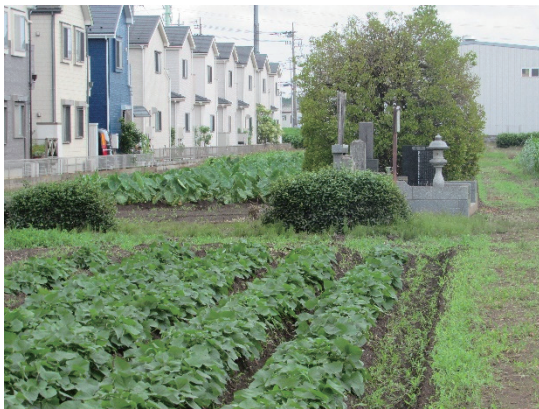
このような功績から明治44年（1911）3月に「平素農事に奨励し、衆人の模範とするに足る」として、入間郡農会長・市川春

太郎より表彰され、木杯一組を授与されている。



明治44年に授与された表彰状

仁兵衛は、大正9年（1920）3月6日、甘藷先生として惜しまれつつ世を去った。享年84歳であった。その墓は、赤沢家前の、終生研究を行った畑の真ん中に建てられている。



「仁兵衛の墓」（川越市指定文化財の史跡）

7 取材談と見習うべき姿

仁兵衛没後100周年記念のため、久々に赤沢家（川越市今福）を7月初旬に訪れ、13代目当主の赤沢一弘氏（58歳）より保存している資料と共にお話をうかがった。

特に新しく分かったことは、仁兵衛は今まで本家で生まれて、分家に婿養子にいったとされていたのが、位牌等をみせていただき、実は分家に生まれて本家の9代目となったことが確認されたことである。

一弘氏は、「今は畑の周りが、開発されて住宅地となり農業を続けていくことが難しい時代となってしまった。自分の代だけでも赤沢家と仁兵衛の功績を守っていきたい」と話されたのが印象的で、仁兵衛の墓の前には大きくはないサツマイモ畑がひっそりと作られていた。

川越では、仁兵衛没後100周年を記念して、30年前に発行した『イラスト赤沢仁兵衛物語』の小冊子（2020年10月13日）を、一部内容を追加して発行予定である。

また、私たちサツマイモ産業に係わる者として、一農民の仁兵衛の生き方を通し、逆境でも一念発起してサツマイモに人生をかけ、地道な研究を行い続け、新たな成果を切り開いた姿を学びたい。



「仁兵衛だるま」（平成3年1月製作）